

中国人の姓名

李 永 寧

Chinese Names

Y. N. Lee

Like Japanese, Chinese present their names surname first. In China married woman retaining their maiden names is a common practice, but in Japan the situation is a bit different. Japanese know less about Chinese naming practice than one might expect.

はじめに

主として現代中国人の姓名について見て行こう。日本人の姓は、“鈴木”とか“斉藤”とか二つの漢字でできている“複姓”が多い。中国人の姓は、“李”とか“張”という漢字一つでできている“単姓”が多い。名は、日本人も中国人も“複名”といって二つの漢字でできているのが多い。日本では、“原敬”とか“都護”とかの単姓・単名、二つの漢字からできている姓名は少い。中国もそうであった。ところがここ20年、中国では単姓・単名の姓名が多くなり、同姓同名という問題でちょっとした混乱が起きつつある。中国では夫婦別姓である。中国人の姓名も日本人の姓名と同じように、先に姓、あとに名、つまり姓・名という順で

は同じである。中国人の姓の数は、日本人のそれほど多くはなく、どれが姓であるかがすぐわかるから、日本人の名刺などによく姓と名の間に一コマほどの空間をあける必要はない。日本人にとって、中国人の姓名は、わかっているようで案外わかっていない。逐次見て行こう。

中国人の姓

ある統計に据ると、古今を通しての文献の中で出てくる姓の数は、6,403であるという。単姓が3,730、複姓が2,498、三字姓が163、四字姓が9、五字姓が3、となっている。しかし、現実には現代ではこれらの姓の半数の姓が使われなくなっており、複姓の数が格段と少くなっているためその数はもっと少い。

1980年代のある統計に据ると、現在使われている姓の数は北京市で2,225、上海市で1,574、重慶市で1,245、成都市で1,631、広州市で1,802、沈陽市で1,270、武漢市で1,574だ、という。そしてこの7大都市で実際に使われている姓の数は2,587だ、とされている。なお台湾では、2,000万近くある人口で、1,694の姓が使われていると言われている。とにかく、現代中国人の姓の数は多く見ても3,000ぐらいと見てよいだろう。

1982年の中国全土の人口調査でわかったことだが、中国全土で使われている姓は“李”・“王”・“張”の三つが最も多く、それぞれ7.9%、7.4%、7.1%となっている。使われている姓を、その頻度の順でならべると、李・王・張・劉・陳・楊・趙・黄・周・呉・徐・孫・胡・朱・高・林・何・郭・馬・羅・梁・宋・鄭・謝・韓・唐・馮・于・董・蕭・程・曹・袁・鄧・許・傅・沈・曾・彭・呂・蘇・盧・蔣・蔡・賈・丁・魏・薛・葉・閻・余・潘・杜・戴・夏・鐘・汪・田・任・姜・範・方・石・崔・康・毛・邱・秦・江・史・顧・侯・邵・孟・龍・万・段・雷・錢・

中国人の姓名

湯・尹・黎・易・常・武・喬・賀・頼・龔・文となっている。

北京市では“王”姓の占める割合が10.6%、“李”と“張”が9.6%、“劉”が7.7%で、この四つの姓が北京市全体の人口の1/3以上を占めていることになる。そして、この四つの姓を含めた“趙”、“陳”、“徐”、“孫”、“馬”、“呉”、“高”など12の姓が北京の総人口の半分程を占めていることもわかった。台湾では、“陳”、“林”、“黄”、“張”、“李”、“王”、“呉”、“劉”、“蔡”、“楊”の10姓で総人口の半分以上が占められていると言われる。

中国で現在使われている姓は漢字一つからなる単姓が圧倒的に多い。漢字二つよりなる複姓には、“司馬”、“欧陽”、“諸葛”、“皇甫”、“司徒”、“端木”、“西門”、“公冶”などがあるが、その数は少く、それを姓として使っている人はごく少い。単姓や複姓は漢民族の姓とみてよい。次に漢民族以外の少数民族の姓について見て行う。

中国には漢民族の外に、人口の約6.6%を占める50あまりの少数民族がある。三字以上の漢字からなる姓は、先ず少数民族のものとしてよい。例えば、“郭布羅・潤麒”（蒙古族）、“愛新覺羅・溥傑”（満州族）、“詹東・計晉美”（チベット族）、“桑頗・才旺仁増”（チベット族）、“良腕友・滾噶旺秋”（チベット族）。普通、姓と名の間に“・”をつけて表記している。それでどこまでが姓であるかがわかるからだ。しかしこうした少数民族も、今では方便のため、“郭”、“愛”、“羅”、“詹”と姓の一字をとって漢民族の姓を使っていることが多い。

文盲の中国人でも誦んずることの出来る、“趙錢孫李、周呉鄭王、馮陳褚衛、蔣沈韓楊、……”で知られている中国の姓を紹介した《百家姓》は北宋の頃出来たもので10世紀以来、中国で最も影響力のある識字啓蒙刊行物でもある。この中には438の姓がのせられている。そのうち単姓が408、複姓が30紹介されている。明代末、黄周星によっ

て《百家姓新箋》が書かれ、清代に康熙帝の名義で《御製百家姓》が、1851年頃丁晏によって《百家姓三編》が書かれ、その後も姓名に関して多くの書が出てきたが、1949年以來の新中国では、なぜか姓についてかかれている書物はあまり出ていない。字典、辞典でも多くをのせていない。《新華字典》では単姓が128、複姓が3で計131。《現代漢語辞典》は単姓が899、複姓が36の計935。《辞海》は単姓が1,012、複姓が127の計1,139。《中華大字典》は単姓1,755、複姓187の計1,942。しかし近年、姓名に関する読み物が多く出て来た。たとえば、《中国姓氏尋根》（胡堯）、《姓名趣談》（徐一青、張鶴仙）、《中国姓氏大全》（陳明遠、汪宗虎）、《百家姓辞典》（海天出版社）と多い。姓に対する関心は時代とともに変るようだ。

中国人は自分の姓を大切にする。事情あって姓を変えなければならない人に対しても、その一族はその人に対して陰では非難がましいことを言い、当人も後めたい気がするようで、子供たちには、そっと旧姓を回復するように言い伝えるが、子供にとっては今使っている姓で生れ育ったので一向に姓を変えようとはしない、という例を知っている。中国人は、自己紹介や他人から紹介されて、初めて会った人が自分と同じ姓であると知るや、“咱们五百年前一家人哪！”（500年前は同じ屋根の下で同じカマのメシをくって来ましたねえ。）と言って、両者の関係がぐっと近づく。北京出身の作家老舍の《茶館》の中で、“哎、王掌柜、每月一号、按阴历算、别忘了！”“那是！我就是忘了姓什么、我也忘不了您二位这档子事！”というやりとりがあるように、そのことを“絶対忘れない、忘れるとしたら人でなしだ”という意味に使われたり、“要是撒谎、我就不姓陳！”と陳さんがそうでないことを首にかけて保証する場合に使ったり、“他得意得不知道他自己姓什么！”と、したり顔に浸っている人を揶揄する時に使ったりする。

中国人の姓名

“咱是大姓”と言って、“李”とか、“王”とか、“劉”とか多く使われている姓を持っていることを誇りにしている中国人がよくある。悠久な歴史に栄えた一族の出であることが自満であるようだ。ではなぜ大姓が生れたか、強大な統一国家が中国に出来た紀元前三世紀末以降の“国姓”、つまり皇族の姓を賜る、ということにふれてみると、その原因が少しはわかる。

漢の“国姓”は劉である。漢の初代皇帝劉邦は即位後、ライバルであった楚の霸王項羽の叔父項伯に“劉”姓を賜り漢王朝の貴族に列した。これは、紀元前209年、楚漢政権相奪の折、当時圧倒的力を持った項羽に劉邦をうつことを思いとどまらせ、危機一発の鴻門の宴で劉邦の命を救った功による。紀元前202年、劉邦は漢王朝の政権強化のための策を献じたという功で姿敬に劉姓を賜り劉敬となし、貴族に叙した。もともと姓がある臣下に“国姓”を賜るということは、為政者の目的ある行いである。420年あまりも続いた漢王朝では劉氏人口が迅速に増加し、“劉”という姓が中国屈指の大姓となる。

唐の“国姓”は“李”である。開国の文武計18人の元勳に李姓を与えたことで、“皇親国戚”として政権の強化に役立てた。帰化部族の首領で鮮卑拓跋赤辞や突厥可汗阿史那・思摩にも李姓を賜った。唐王朝290年の間に李氏人口が急速に増加した。

宋の“国姓”は“趙”である。そしてその320年で趙姓人口が急速な伸びを示した。

明の“国姓”は“朱”。明も政権強化のため賜姓を盛んにやった。永楽の頃、献策功ありとのことで、あるユダヤ人の医者に朱姓を賜った。南明の頃、隆武帝は鄭成功に朱姓を賜る。近松門左衛門の人形浄瑠璃時代物5段に《国性爺合戦》という作品がある。50、60年以前の明と清の抗争期に活躍した、鄭成功（1624～62）に題材をとったものである。

鄭成功の父鄭芝竜は中国人で母は日本人田川氏の娘であり、鄭成功自身は日本の平戸で生れた。そして7歳の頃、中国福建省の父のところに行き、南京の大学で学んだ。1645年、福建に帰り、南明の隆武帝より国姓をもらい清に反旗をひるがえし、抗清復明のために闘った。“国姓爺”であるべきところを、なぜか、近松は“国性爺”としている。なお、“王爺”とは、“王様”のこと、“老爺”とは“旦那様”のこと、“少爺”とは“若殿”とか“若旦那”のことで、貴族とかいわゆる身分のあるものを中国ではさす。現在でも、福建省や台湾省の人たちは鄭成功のことを“国姓爺”とよんでいる。

中国人の名について

名とは姓に対し“なまえ”。姓(苗字)のあとにつける。漢民族の名は、漢字が二つと漢字が一つのあるが、漢字二つのものが圧倒的に多かった。たとえば、李家に四人兄弟が居れば、“(李)永健”、“(李)永康”、“(李)永寧”、“(李)永雄”で“永健”・“永康”・“永寧”・“永雄”の部分が名である。永は共通しており、“永字輩”と言って世代の横のつながりを示す。父方の兄弟も“永”字がつき、一族の同世代の“堂兄弟”で、あとつぎがない場合堂兄弟から後継者をえらぶということになる。健康寧雄でそれとなく兄弟の順位がわかる。由緒ある旧家では名前が一族におけるその人の座標的役割りをしている。清朝の家系を例にとってみよう。ヌルハチにつぐのが皇太極。第一代皇帝が順治帝で愛新覺羅・福臨。これが“福”字輩。愛新覺羅家は順治帝からはじまって皇帝が10代まで続いたのだが、現在までその輩数を示す漢字をずっと並べてみると、福・玄・胤・弘・顯・旻・奕・載・溥・毓・恒・啓でこの12字を連ねたものにある程度の意味が込められていて愛新覺羅の祖

中国人の姓名

先がその子孫に托した思いがうかがえる。7代目皇帝が“奕”字輩の奕譞が即位して咸豊帝。8代目が“載”字輩の同治帝。9代目は帝位を代代伝えるという主旨から、つぎの“溥”字輩から出すべきところを実際は同治帝と同じ“載”字輩である載灃が位につき光緒帝となっている。これは同治帝の母親西太后が愛新覚羅家の封建思想にもとづいてうちたてられた王家の家法をあえてまげてでも“垂簾聽政”を続けようという政治的野心とその実権の強さをうかがいみることが出来る。話しを姓名という本題にもどそう。日本でもラストエンペラーで知られる愛新覚羅・溥儀の溥を例にとってみると、溥傑・溥儀(夭折)・溥任で儀・傑・供・任で“人”偏がついて“溥”字輩の兄弟であることを示し、溥儀の父親である第二代醇親王載灃が第一代醇親奕譞の頃より西太后や列強の言いなりになってオドオドして生涯を終えたのに対して自分の子供たちは義傑其任つまり毅然とした態度で王者としてのdutyをつくしてほしいとの願いが込められているのではないかと私は見ている。溥傑さんには二人の娘さんがいた。一人は早くしてなくなったが、下の方は日本人に嫁いで自分の姓愛新覚羅は夫婦同姓ということで消えてしまった。6人生んだが長男は“恒”^{わたも}という名である。ある日命名の主、溥傑さんに、それは、“溥・毓・恒・啓の‘恒’なのでしょう”ときいたところ、あっさり、“就是那么个意思。”と率直に認めた。中国人の姓名に対する執念はすごい。血筋を万代まで残したい意志がこの一例でものぞかれるのではないかと思う。

王家の家系の整然さにはとても及ばないが、私の父も自分の子供に自分なりの希望を托して名をつけたものと思われる。とにかく健康で生きてほしいで“健・康”。戦争が始まりそうなので平和であってほしいで“寧”。戦争が始った以上は雄々しく戦って勝ってほしいで“雄”。それで私たち四人兄弟の名は健・康・寧・雄になったのだと思う。

子供につける名は、親の思いが込められている。女の子に対しては、美しくしとやかに、という思いから次のような漢字がよく使われる。たとえば、①娘・女・姐・姑・媛・婷・娜；②花・華・英・梅・桃・蓮・菊・鳳・燕；③秀・統・香；④玉・珮・珊・琮・瑛。⑤美・麗・倩・素・青・翠；⑥月・雲・雪・雯・春・夏；⑦愛・惠；⑧淑・嫻・静・巧・慧；と名づくのはだいたい女子の名だと見てよいだろう。

単名について

ここ20年の社会の風潮の影響をうけて単名が多くなって来た。中国人の姓は単姓なのが圧倒的に多く、しかもごく限られた姓に集中している。その上つけられる単名も社会的流行からごく限られたものになる。その結果、確率的に言っても同姓同名のものが多くなる。

今世紀50年代、中国人の複名の占める割合は93～95%、それに対して単名は5～7%にすぎなかった。とくに1966年からの文化大革命によって、単純化した価値感により、“紅”とか“軍”とか“東”とかのごく限られた単名に自分の名を改める風潮がকাশ出された。そして生れて来る自分の子供にもこうした名をつける傾向が強まった結果、同姓同名の人口に占める割合が急増した。

1970年までは天津市の単姓単名の占める割合は5%に満たなかったものが、その後は単姓単名の数が激増し、今もってその増加の勢いが弱まらないということが戸籍調査によって明らかになった。天津市民の1/3が単姓単名である上、ある特定の単姓単名にかたよっている。天津市民500万人のうち2,300人の姓名が“張力”であり、2,000人以上が“張英”と“張健”、2,100人以上が“張穎”。天津市和平区の第一幼稚園の4歳から6歳までの園児332人中205人が単姓単名で、その割合は

中国人の姓名

62%に達している。しかも名が“力”・“麗”・“莉”・“丹”・“佳”・“飛”・“潔”・“強”・“勇”などごく限られたものに集中している、とのことであった。中国では子供の名を呼ぶ場合、名を重ねて呼んで（一ちゃんに相当）いるので“麗麗！”も“力力！”も“莉莉！”も“荔荔！”も同じ“Li-Li！”音なので混乱が起きるのではないかと思われる。みんな“リリちゃん”なのである。参考のため、外の都市について例をあげてみて行こう。

広州市では“陳妹”と“梁妹”がそれぞれ2,400人。沈陽市では“李傑”と“王偉”が3,000人。武漢市では16歳以上の人口のうち2,000人以上が“李斌”と“王紅”と名乗っているという。同姓同名の割合は中国12億の人口でどのくらいの率を占めるか、今のところ統計のとりようがないが、相当な数になることは間違いない。

中国語学の大御所に“王力”がおり、文化大革命で大活躍しすぎて投獄されたのにも“王力”がおり、私の同僚にも“王力”が居た。“下放”した私の同僚の“王力”が病気して田舎の病院に入院した。ベットに横たわったその“王力”は若い看護婦に、悪いことはしてはいけないと、とくくと諭され、最後に、悪いことをしても悔い改め、心を入れかえてしっかりやれば皆は許してくれるのだ、と励げまされたと、その王力から聞いた。

兄弟が複数いて名を複名にしてはじめての漢字で輩数を表し、あとの漢字で親の子供に対する期待とか希望を表す必要は、1978年以来強引におし進められた一人っ子政策ですたれ、単純化された価値によって限られた漢字の範囲で名付ける親が多くなったのも同姓同名が多くなったものと私は判断する。

中国の若い世代は、日本の若い世代と同じように、難しい漢字は苦手である。それで、外国人の名の音に近い“リリ”（荔・莉・麗）とか

“ナナ”（娜）とかいうハイカラな名を生れて来る自分のただ一人に限られた子供につける傾向がますます加速されるのではないかと私は思う。

“一人っ子政策”によって一人しか生めない婦夫両家のお宝であるから、子供には両家の姓で姓名となすという傾向が最近めだつ。たとえば、“曲方”とか“陳姚”という名付け方である。これは現実にある例である。なお、本多浄道先生が御自分の娘さんに“浄子”という名をつけて姓名は“本多浄子”とする例がある。日本ではよくある名付け方であるが、中国ではこのような名付け方は絶対がない。中国の伝統的な考え方からすると夫婦どちらか、つまり父か母の名をその子供につけるなんて、とんでもないことである。父親または母親を呼び捨てにするに等しく不孝なふるまいなのだ。

その他

日本では私の姓を“季”と書く人に出遇う。“季”という姓は中国にはたしかにある。しかし私は“李”であって、“季”ではないのである。北京市内の鼓楼街の近くの銀錠橋のそばに老舗で屋号が“烤肉季”というのがある。私は私の姓を“季”と間違ったりされると“私は焼肉屋ではありませんよ”と言うことにしている。中国では相手の姓や名前を間違っって書くことは大変失礼なことなのだ。文化大革命の時など攻撃する相手の大字報のタイトルの姓名は意識してさかさに書いたり、御丁寧に“×”印をつけたりしたのを憶えている。

清の第三代の皇帝雍正の頃、“文字獄”の嵐が吹きまくっていた。科挙の試験官が《詩経》から“維民所止”という題で文章を書かせたが、ざん言されて出題者はとらえられて獄死、その首はさらされ、その子も死刑、一族は流島、ということになった。雍正は民に首を切られて殺さ

れる（雍正为民所弑）というあてこすりだというのだ。“維民所止”、“維”と“止”にアタマをつけてやると“雍”と“正”になる、つまり“維”“止”は“雍”“正”のアタマをちょん切られたものであり、“止”は“殺”“死”の意に通じ、“維”の音は“為”に通じ、“雍正為民所弑”、殺され方は首を切られて、ということだ。文化大革命の是非については私はまだ何とも結論を出せずにいる。ただ、この文化大革命は、中国五千年の歴史の民族のきたないところを余すことなくさらした時期でもあった、ということは出来ると思う。ざん言で人をおとし入れる、ということも、そのきたなさの一つだと思う。文化大革命時代のざん言の一つ：大字報で、ゾウリ型のスリッパの発明者は反人民的な反革命である。なぜなら鼻緒の形を見るがいい、“人”字ではないか！人民を踏みつけるように仕向けている！と“告発”。もう一つ：私が、1970年頃、文化大革命についてなどにどうも腑におちないので、一言“毛沢東全集がはやく出て来てくれるといいのだが”とつぶやいた。《毛沢東選集》全四巻はすでに出ていた。当時中国のマスメディアは、偉大な指導者毛主席はすべてお見通であったので…。というのを忘れずに加えていたので、私のようなレベルの低いものには、毛沢東全集を見なければ、中国でおきている不可解な現象がわからないのではないかという思いからのつぶやきでもあった。その時、そばに居た一人が、一言、“君は毛主席がはやく死ぬのを望んでいるのか？”といった。なるほど、全集はその人が死んでからでないと出版されない。幸い、その人はそれほど悪いやつではなかったので“告発”はされずにすんだ。

文化大革命の間、あいつは子供に反革命の意味を持つ名をつけた、四人の名を連ねて読んでみろ、蒋介石の肩を持つ意味ではないか、1949年以前の中国に未練がましい意味が込められているではないか等々の大字報が多くあった。

漢字文化の奥は深い、それをきわめるのは至難である。今どきの中国の若い世代は忙しい。3,000字もある難しい文字（英語は26文字）をマスターする外、英語とか“学軍”とか“学法律”とかをこなさなければならぬ。したがって結婚して子供が生まれる段になってもそれ相当の意義を込められるような漢字の素養があるわけではなく、単純な価値感によって、そつのないありふれた名をつけることになる。その結果、単姓単名の二つ漢字でできている同姓同名の占める割合がますます多くなって来ている。社会活動に支障をきたさないようにするため、現在強引に行っている一人っ子政策のように、戸籍法みたいなものをつくって、単名を禁じ複名を強引に押し付ける必要が将来は出て来るのではないか、とも私は思ったりしてしまう。

おわりに

新撰組の土方歳三の姓土方の読み方が難しい。坂本龍馬の名の読み方も難しい。選挙ポスターに御手洗某がのっていたがこの姓“御手洗”の読み方も難しい。中国の姓の読み方だって難しい；褚（褚絲）・繆（綢繆）・兒（兒童）・区（區別）・朴（朴素）・仇（仇恨）・單（單獨）・洗（洗臉）・解（解放）・曾（曾經）・查（検査）・翟（墨翟）姓で読むのと（ ）内のとは読み方が違う。現代中国人、とくに漢民族の姓はほとんどが単姓で複姓は少い、そして3,000ぐらいだとは言え、正直言ってそのすべてについて私は正しい読み方が出来るというわけではない。中国人の姓名は深く研究すると限りがない、底無しのドロ沼にはまり込むような心地になる。欲張っても仕方がないので一応以上のような浅い研究にしておいた。同時に、このような研究を時間を十分かけてもっと深くやって行く人が出て来てもよいのではないかとも思う。そうすることで

中国人の姓名

中国人独特の文化思想をのぞき見ることが出来るのではないかとも思う。